

錦畫百事新聞
其他

西垣文庫 特
文庫 10
7355

時
文庫10
7355



後次はひと
人形を
まを人の
百とあとの
あまの
その授の
く作は後
父と母と
おやへん
まんぞ
たちの
のへと
才も
せー人
まま

手紙

文庫

大坂 後連

四の谷内及村に相出村の
 伊豆屋のたぬあり大坂とよ

路城のこが空をすまふの
 うられもくみて寝るをさ
 けま切り小糸へうちま
 なる種さのせんくのか

髪を切り指を切るをいらい我か
 かりとよとあやそふらふまの
 つらみあつたせむあやそふらふまの
 ちんがあひちりいさんと後りりる拾得るる



夏屋

志系半の三月終安きが姑
 おおんの子守子あお二市郎村のふは
 よままが二男のうまこちありのるへ父母
 仲人よまなめくうんせれど
 ねん金たはひい今をを

アえんせに治治八年二月十日
 おおんがあふあのがい今をのくへおま
 きーんせれねね血おひせ
 母のねくろ大をうとりの
 妻おあつり海神

一百万
 一がとんせ
 船のふれは
 なる西の
 ま

新屋



大阪 錦恵



上流の浮世に村の住むる
 十段のふたりの村の住むる
 十段のふたりの村の住むる
 十段のふたりの村の住むる
 十段のふたりの村の住むる

十段のふたりの村の住むる

新橋

九百

大阪 錦恵



二月十四日
 錦恵小舟丁
 大活のし
 大活のし
 大活のし

大活のし
 大活のし

新橋

新世神原



棲居の三座
 み大か衣帯の太板
 願丸音崎を糸が
 門才おうられ初年
 由して力量人小紙へ
 米依をめてゆきひ力
 業を好く強小款金更
 いづく七年五余月小て大を扇力の
 去依入をせしはらふふ
 新世のまをふと
 いふべー

新世神原

大坂新町四丁目



板倉新町四丁目
 五ふり板江のりささかや中
 のこみは新屋敷
 西をうをくし
 二全を石のせとくま
 きやだつぐとくかか
 百とれれりめんおひふ

新世神原

新世争原



大坂の町
城小橋
有
手取りへう
くれきつ
でいせり
此の町
害あり
司馬と

広君をせ
むろ小次郎
ハ強奪か
めつの
此の町
大坂の
一と囚
ヤ侍重
と

新世争原



東京の町
新右衛門
婦人小次郎
あらー
あつ
おの
町のは
おの
をよ
のよ
あつ
あつ
知
笑
屋

東京の町
新右衛門
婦人小次郎

大坂 孫 正



大坂 孫 正



明治八年六月廿六日

堂下町喜一自刃の事

林下町三郎の事

町の住人松本政阿の事

せしめられぬか

世に名をたて

男入の事

おれふり

麻呂の事

かき

後を

あま

あま



身命せしめ

あまの

新刊

新刊

お加小谷村

牌は

あま

死

園村

と

の

あ

あ

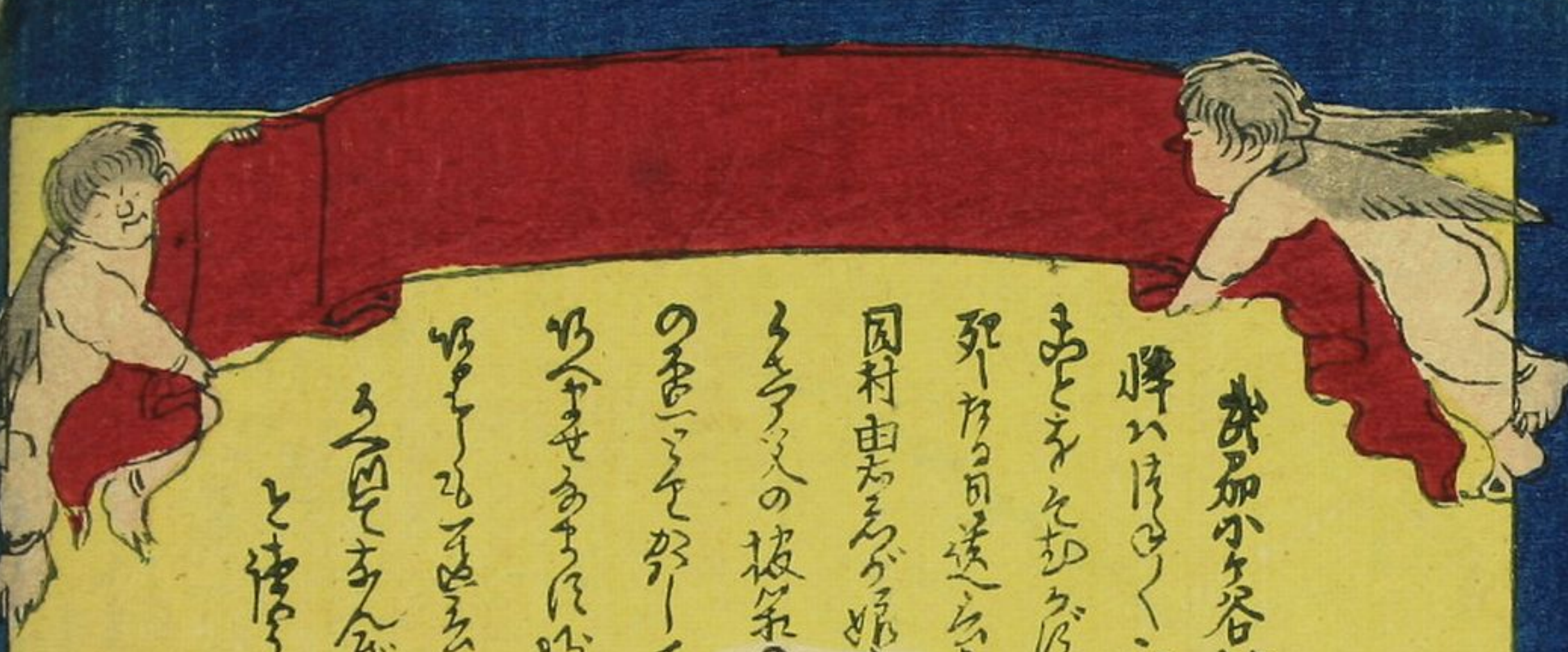
あ

あ

あ

あ

あ



百重錦 新開 附録



依中のお浦口郡玉渡村の田崎治をよ
 手舞ふお人ぞ

廿三ある
 後ごひを
 知久廿度やま
 改てふ年より
 あがかりろらばや赤肉を
 扱ひつひやまをさうとえんせー
 後改を白ひが白ひたるは又
 やまをさのえんせんとうるや
 けんもろくのまとも舟を
 むねんおあひやをっつ
 のれがるもろくかあまのれは

大阪 錦 悪



大坂日新下長谷町の
 道傍ゆ明作八年二月
 廿九日巡礼二人りを切あうし合を切る

婿のひま
 福山のま
 妻か海ん
 せつそ
 そあふとつて
 常夜のはつとつてあつたのま
 ちらふとつてあつたのま
 函若天の綱をおるべ

新 伝 壺



官許 錦書百事新聞 第百六十三号 明治九年七月卅一日 月曜日

其むかー宮城野信夫が仇討の常院（正雪）の恩義と共に名と残一たる白石譯古今仇討と數多聞およぶも昔の夢と消失一の 王政維新以降全く五保護の爲に絶たり此頃哀な話あり升古郷と跡に二人の女身は鬱憤の起と探る國の伯耆の西宮横道町開仙寺門口に住む安吉といふ者の故有て同所の某等三名お殺害せられ跡は残り一妹かめ四十二年娘小菊十六年の最も遣る瀬の泣心かり哀憐悲歎の心根と合せて四ツの袖絞る嘸や臨終の無念さ

思ふ絶かね苦い死とや一給ひけん嘆姪顔と見合て甲斐亡體と揺動一身も浮くばりに泣沈一のキツト心と取直し怨み重る三人の俱不戴天と世もいふ父と兄との仇敵此日の本にいふもとろか英國米國お身と潜むとも女の一念探し出し佛の修羅の苦と報ひひで置べきやと軟弱き女の手一得て敵の手荒き三人なれど日頃念する神佛の力とかりて宿願の成ざる事のあるべきやと馴し所とふり捨て姨と姪と順禮すがた人の夫とも知ぬ地へ

あらとうとみちびきたまへ觀音寺と三年前以前に定めなき旅路の空とまゝ、ろざり出たるま、いまご咄一の切れませぬがまどながけきき今日此邊をわきまゝして近くつゞきのおいらせを致し升
○謝白
染手拭一釘和さんより金十錢 姉川さんより金壹朱鷄殿さんより 配夫五
大阪心齋橋鹽町角 本局 百事社
社長兼編輯代理 金井徳兵衛 前田喜兵衛 印務



後日堂花信局
錦畫

百六十三號お書残一の伯耆の
國姫が仇討咄の續きチトひ
つこいと思し召うがマア聞て
お上げあさい夫から我住なき
一古郷と後お見て若や繁花の
地又ねらふ敵の足と止める事
もや有んとわちらら二月あち
ら又三月とまど天運至らぬや
夫どと思ふ手掛もなく種々様
々の艱難辛苦かぞへる月日よ
關守あく身に降積る星霜の三
年がうちと泣明し今日り翌り
と取どめぬ翹かよのき羽拔鳥
雲井と慕ふ如くなり近頃攝州
兵庫の津へ渡り來て七月九日

午時過に同所相生橋と通る折
しもフト向より來かゝる女の
コハそも年月たづね求る仇の
中なる爲二と言者の女房なき
バ二人のかくと見よりも盲龜
の浮木優曇華の花待ち得たる
今日唯今二人の傍へ走寄袖を
捕へてコソ申をあたに尋る子
細わきバ妾等と伴ひ來りねと
警視の廳へと運行て事の次第
と訴出て仇討の事と願うゆへ
直様爲二の縛せられ余の黨類
も巖しき詮索中なるよお龜
さん小菊さんお二人の心根の
相生橋の時ハ賑や嬉う五座り

升たで有ませり神戸新聞普通
新聞おも出てあり升ぞへ
○七月廿四日清水坂のどさく
さい之かとい事跡より委
出します○同廿八日梅田道ス
テーシヨンの邊のどさくさも跡
よりどちらも少いお待下され
ませ○茨住吉祭禮の八月十八
日○坂惠座の前狂言鏡山中千
兩職切伊勢音頭近日とどめる
女芝居でと

大阪心齋橋塩町角
本局 百事社
社長兼編輯代理 金井徳兵衛
印務 前田喜兵衛



官許 錦畫百事新聞 第四百一十一号 明治九年七月五日 水曜日

公布

○第拾壹號

大坂京都間鐵道略落成ニ付大坂ヨリ京都府下向日町迄來ル
 七月上旬ヨリ瀕車試運輸開候
 條此旨布達候事

但開業當日之儀ハ追テ可及
 布達候事

明治九年六月三十日
 工部卿伊藤博文

○さアどるゝもどふでそくく
 淀川の絶景を眺め清風と身お
 ひかひ一瞬の間小西山東山の
 遊覽どの嬉トや有ませんり
 ○人の將小死るんとす其言善

と五月末の頃ありとや備中國
 藏鋪村山内仙吉厄介うた廿四
 年の久しく服水病で臥し末々
 のも一からぬ身とあり我と難
 病とかち親類縁者と呼び集
 重き枕と擡げ算お濁る取水の
 玄だいお弱る細音おて皆さん
 私か一ツの願ひ迎も此世おい
 つ迄も生るがらへると思ませ
 ぬ夜半の嵐と目前おうける此
 身おぜひもあく死後お至らば
 亡骸と醫者お頼んで解剖して
 此病根とあらため見て此後同
 一病おて腦煩ふ人の爲まゝ世
 の爲とさめくと今遺の遺狀

かあへてと若き身おべら殊勝
 ある願ひと聞て傍よりも親の
 泣寄るいとさ余儀るく縣
 廳へ望と伺ひに其趣聞濟お
 ありまゝと誠お得實の心底
 哀と感心で有升 (備作新聞)
 ○此節雨續で氣持お悪い用お
 片付ぬ道お悪いと市中でい言
 升お在方お植付お出來揃て大
 喜向お見ずお朦言譯でい無い

本局 大坂心齋橋鹽町角
 社長兼編輯代理 金井徳兵衛
 印務 前田喜兵衛



毒殺の現場

買物屋

許官 錦畫百事新聞 第百六十七号

播磨國明石大手邊の何某の親
一人子二人で家内睦一からず
兄の陰お女が有て其方へ籍と
分け互お腕と磨といへども兄
の方へ福の神の降親又弟の方
のれぬく糊口は迫サ兄の積
溜が羨しく親と弟のキツト思
付一策の或る夜兄夫婦は酒
と進んと呼迎へイソく来る
夫婦を引入を夜深お成て酒よ
引替へ二人に向ひサ是と呑べ
一忽ち死地お陥る毒薬ありと
心猛も突出すに二人の初て仰
天一是れと驚き逃出おかねて
同類と忍せ置無理無体よ寄て

掛つて夫婦の口へ押込一お俄
に腦亂七顛八踏其場であへあ
くありよりシテやつたりア
もろい物シヤナへいんと男
の死骸納屋へ投込重石と置
虫の息ある女庭へ捨直何角
の後にと天から徳利と傾け同
類もろとも呑ぶも呑ぶ果ハグ
ウく轉び寐の跡の深く更渡
り幽聞ゆる遠寺の鐘夜風お
ツイと氣の付り身荒縄は柵
んで庭に捨る彼女の量らず
此世へ蘇り天哉命哉庭の切戸
の明いと幸ひ我身の繩と解捨
て息を喰締こそくと傳ふ隣

家の座敷先戸主の呼寄悪工の
荒増と聞とり土藏へ圍ふ折こ
そのれ志黨寺の眠と覺一庭の
女の行衛が知れず隣家を疑ひ
探せりち早此事が發露して天
の網目と彼一後納屋なる男と
引出せば又是正く生戻り一
是樂店が強て頼と死活の毒の
配劑せいと記者の一切保証せ
ざれと此佛と劇場よ取組該地
る本戸と争ふと通戀の人の噂

大阪心齋橋鹽町角
本局 百事社
社長兼編輯代理 金井徳兵衛
印務 前田喜兵衛

官許 新事百画 了



大坂府下町又大至小西小所町二百
 石橋を渡る多の人力成業して切取大和をし返す
 中まちをして、

張



瓶 乱菊の上 叢小隠
 おりるひあふいせんをり
 日中橋は下町本好やくと増の長

方止者 去る物 在る家

娘の

お人連を
 人力なまが苦
 店のかくれ
 の空のまが
 巡査の中
 山出渡り



大坂大橋町角 前

金井徳兵衛
 印刷人前山喜次郎

新編 日本書紀

酒の百葉の
長も故りて

謝譯

あしと
秋心の玉
笠帯と名

つけ身がうそ
片便してなるまで

こころ井がすなへんを
たすけしるが天阪府下弟三天區

廿小区幸町通五丁目一番地栗山まみ

方お止宿まる敦賀縣下越前国坂井

郡濱坂浦坂井吉三郎ハ廿九年あるが

弟六天區二小区難波島辺の川

流きてこも苦仕氣あるを身三天區
四寺がまを佐木虎三郎えんお助けらま

まじりて安木の余酒で踏かろりま

とあまの物でらりキ畢竟

かつかりんが勉強あるがあを命の

観るるこ心得以來慎し

金井徳夫
前田豊次郎

白鳥伝

大徳寺橋邊町角新開
前田豊次郎



錦 画 百 事 新 聞 九七号



大坂ふんばに三月のせんす
 ののけり及法をうのびて千
 せそんやそちのよきひみ
 のあまをてんおあかりを
 みるりかた入ん
 てるりあまそ
 てのちち中
 ぬげんありま
 せぬ物町のびぬのまき
 びべいんがまがのまらん入



のちあまののあながあまの
 みよをそこのふみむを
 まさふりふみだれ金千
 本とたまりす ねんが真大
 日本七士のあまらへ



△あまのまき
 ちうけりあろくあろくどのちまき
 まちりまのおかまきこいあまらま
 おごりあまも
 あらばあま
 ちあまや
 ふあまを
 のちあま
 ちあま

あまのまき
 あまのま
 まあまのま
 ねん七まきとあまのま
 むらまをたろあまんとあまのま
 ままをたろあまのま
 むらまをたろあまのま

金井
 田

大阪

錦州 第六号



甲加六目村の岡部伊九郎の七ヶ年ぶりの
病ひがのそあし困て居るを十七の
息子竹次郎が

よまししんを

いんて

その桂芝を

山して拾て

孝のし指りする

月日もいふふ

あまの影あ

漁り若の代

とあしは

看病あ

事いふ孝行

はく田田

明治八年三月ふ散る淡雪

あま早しんを



難波

午守
孝行
カトラ

孝行のし指り

孝行のし指り

孝行のし指り

孝行のし指り

孝行のし指り

孝行のし指り

孝行のし指り

孝行のし指り

孝行のし指り

孝行のし指り

新聞畫會

第七号



下総の國相馬郡

一のま室村にて去戌の年

十月道普請の爲に堤を

崩したる處偶像を掘出ス

大キサ五六丈の立里子の如く

甲冑を著したる少女なり

往昔朝敵將門知術に

用ひしものなるんとの風評を

東京日々新聞九百六十八号に

見たり

猩々堂九化記



新報



八辰堂

木ノ志









女房のうらやま
 おもひながら
 おかしなものを
 女房にまじや



女房吉田村のむせうしの御
 始におよび十八年あつたおとこ
 女房のうらやま
 おもひながら
 おかしなものを
 女房にまじや



女房西てたてては
 ちたつて我がわんさか
 女房のうらやま
 おもひながら
 おかしなものを
 女房にまじや



女房のうらやま
 おもひながら
 おかしなものを
 女房にまじや



おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび

おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび



おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび

おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび
おききやうせん
かすたあそび



明治五年 五月
 加賀佐の村
 とあるのトサガ
 といひのれさう
 といふまじきや
 といひのれさう
 といふまじきや
 といひのれさう
 といふまじきや

と新屋お一笑せり

夏修



十世の事
 又かほり
 ても切らん
 いまはえんやとてあやま
 母弟のあこまを引ちりお
 ちまもかかるといひ
 といひのれさう
 といふまじきや

一あこまがヨイとわきま

夏修



母の藤岡大助主候
 首せさま 女おさう
 といひのれさう
 といふまじきや
 といひのれさう
 といふまじきや

あや

夏修



大改修後美川
 病おらるといひ
 といひのれさう
 といふまじきや
 といひのれさう
 といふまじきや

一あこまがヨイとわきま

夏修



大坂の御町六月廿五日

あつちの無邪く
 母申下不を産を
 びてめでたしめでたし
 をは下せよよの
 娘打めよよと妻
 ゆれんをえいごう
 おしよあおれ
 とまをねんあつちを
 おやをねんあつちを
 おはせよよひのじしゆを
 せよよといひかひぬのん
 かんをせよよいふかあな
 世のりかたをいふん

あつち

初平留や下版書
 守者ハ此年守月
 中ま天通り飛時
 袖波母ハ里上車
 上月あ人かひて
 ふうくあれゆか大
 返さあゆえん
 志子をいふまは
 言ハハあつちが
 川にうまう門を
 守る重下天
 押せしあ
 自をねんあつち
 をおろ
 さあ

あつち
 しあああああ
 あああああ

あつちの無邪く

あつち

あつちの無邪く
 母申下不を産を
 びてめでたしめでたし
 をは下せよよの
 娘打めよよと妻
 ゆれんをえいごう
 おしよあおれ
 とまをねんあつちを
 おやをねんあつちを
 おはせよよひのじしゆを
 せよよといひかひぬのん
 かんをせよよいふかあな
 世のりかたをいふん

あつち

あつちの無邪く

あつち

あつちの無邪く
 母申下不を産を
 びてめでたしめでたし
 をは下せよよの
 娘打めよよと妻
 ゆれんをえいごう
 おしよあおれ
 とまをねんあつちを
 おやをねんあつちを
 おはせよよひのじしゆを
 せよよといひかひぬのん
 かんをせよよいふかあな
 世のりかたをいふん

あつち

あつちの無邪く

あつち

あつちの無邪く
 母申下不を産を
 びてめでたしめでたし
 をは下せよよの
 娘打めよよと妻
 ゆれんをえいごう
 おしよあおれ
 とまをねんあつちを
 おやをねんあつちを
 おはせよよひのじしゆを
 せよよといひかひぬのん
 かんをせよよいふかあな
 世のりかたをいふん

あつち

錦繪盡



元柳川家
任を養育
ノ人ハ
カストラ
ノキミト
諸人ノ見
と其造つく々小地
堀一いツの壺出せり
其中
小保
字小判
百円有
よみて早
速府い届出たり

錦繪盡



唐物町井池
入江平助の
養
市川
おしおららふふててええ哥ごの
師匠し匠じやうとして義
の親おと養やういいが父
平助ハ女房にやうぼうを生国
廣ひろいいぢぢりりて度たおおりりと
くくどどききおおりりささくく思しひ
或ある夜家出いへだちちて廣ひろいいぢぢへ
走り義よりりの母ははおおつつととかん

小娘こなごららののつつととかん
借かけ
販賣はんばいする者

錦繪盡



鳩の内
八幡丁赤沢
其妻そのおおくくハ
夫おの病氣びやうきハ千せん辛しん
万まん苦く一いつ毎夜水まいやと
ひひひひて神仏かみぶつおおちちううひ
祈いのりりが終はつおお夫おハ全快ぜん
せりせりとぞ実まこと感かんどどへへききととなり

錦繪盡



西京八坂
新地藝子
恵めぐと松まつハ祇園
の西門にしもんおおて松原まつはら敷屋しきや丁ぢやうの
高松たかまつとといいへへる老人らうじんの急病きゅうびやうと
つつろろくく介抱かいぼうせり車くるまおおて送おくり
せりハ浮うくくる世渡りよわたりぢぢを者
より実まことおお稀まれなる情婦じやうぶとといいべ

小娘こなごららののつつととかん
借かけ
販賣はんばいする者

前田喜次郎編輯 違式註違圖解

違式註違條例別冊之通相定來ル明治十年二月二十日ヨリ致施行候條違犯之者無之様下々召遣之者ニ至ル迄懇切可申諭此旨管内無洩相違候事

明治九年十月廿日

大阪府權知事渡邊昇



第一條 違式の罪を犯す者ハ七拾五錢より少くとも圓五拾錢より多しらざる贖金を追徴ス

第六條 違式の罪目を犯すと雖も暗狀輕者ハ減等して詩違の

第四條 病牛死牛其他病死の禽獸を知りて販賣スル者

第九條 夜中無燈の馬車を以て通行スル者

第二條 罪を犯す者ハ五錢より少くとも七拾錢より多しらざる贖金を追徴ス

違の罪目を犯せて違式の贖金を追徴せし其犯す處極めて輕さい止む可敷く免るる者

第五條 湯屋の渡世の男女を混浴セシムル者

第七條 所於て安りに火杖を玩ぶもの

第三條 違式註違の罪を犯し無力の者の實決まる左の如し

一 違式懲役 八日より多し 十五日より多し 十五日より多し

二 註違拘留 七日より多し 十五日より多し

第一條 質造の飲食 物并 府殿の食物を知りて販賣スル者

第六條 但殺傷此限小あら

一 猥り小車馬を疾驅し人を觸ル者

第十條 戲小往來の常燈臺を破毀スル者



違式并々
誑違の罪ハ
より取上ぐ
べき物品ハ
贖金を科
するの外別ハ
没収の申渡を爲



第五條 違式誑違
犯人ハ損失
を蒙らう
ある時ハ
先づ其損
夫に當る
償金を
を出さ
しめ後ハ
贖金を
命ぜら



下水外河中等
家作并孫宛
等を自在張出
願あり
或ハ河岸
地除地等
者



第六條
其類の諸器
物を販賣
する者



第七條
外國人を
て止宿せし
届め
者



第八條
外國人
私に
雑居せし
むる者



第十條
橋梁
道路
通行
者



第十三條
蛇遣ハ其他
を見世物
出さ
者

